



花はどうして、咲く季節が種類によって決まっているの

花が咲くための合図があるから

花が咲くためには、花になる花芽が、用意されていなければなりません。植物の種類によって、花芽ができるための合図があります。昼間の時間(明るい時間)が、ある一定の時間より長くなると、花をつけるもの(長日性植物という)があります。逆に、昼間の時間が短くなると花をつける短日性植物もあります。

春から初夏にかけて咲くアブラナ、アヤメ、ダイコンなどは、長日性植物です。長日性植物のムクゲは、明るい所に12時間以上置かれるのが続くと、花芽ができます。ペチュニアは、14時間以上明るい状態の日が続くと、花芽ができます。

だんだん日が短くなる、夏から秋にかけて咲く花は、短日性植物が多いのです。アサガオやキクは、明るい時間が10時間以下になると花芽ができ、コスモスは、明るい時間が12時間以下になると花芽ができます。オナモミやアサガオは、一度だけでも、明るい時間の短い日があれば、花芽をつけるので有名です。

サクラのように、一度、冬のような低温にさらされないと、花芽がつかない、温度による合図もあります。

人工的な合図で、季節はずれの花が見られる

今では、これらの植物の花芽をつけるしくみを知って、人工的に、花の咲く季節をずらす方法が行われています。サクラなどを、冷蔵庫に入れて寒さにあわせ、お正月に花を咲かせたり、キクに電灯の光をあてて、明るい時間を調節し、日が短くなったとかんちがいさせて、花を咲かせるなどです。(監修・矢野 亮)

